

エッシャー 《物見の塔》



広大な眺望をのぞむ高所に建てられた櫓。絵を見るものは、手前の市松模様の床から、背を向けた二人の男女とともに、順に一階そして二階へとたどっていくことができる。しかしただちに、建築物の構造と梯子との関係が、この現実においてはありえないものであることに気づくはずだ。描写が細密であるだけに、そして視線が丁寧に経路を進むほどに、ねじれの奇妙さは、所在をくらまそうとするだろう。三次元では不可能なことを二次元で錯覚させるという、トリックにおわるものではない。それによってもたらされる、規定しえない空間の感覚こそが、この作品を一過性から救っているのだ。

曲芸師や動物や楽器などが散りばめられた画面は、楽しく運動感にあふれている。空中を浮遊する人々というのは、シャガールがもっとも得意としたモチーフである。眺める観衆をも含めて、会場のざわめきが聞こえてくるようだ。

サーカスについてシャガールはかつて次のように語った。「サーカスは最も悲しいドラマだと思う。それは何世紀にもわたって人々の悲しみや喜びを追求した者の究極的な鋭い叫びだ」。

夢と現実とが交錯するサーカスの世界は、シャガール芸術の汲めきども尽きぬ源泉であるが、愉快的雰囲気の中に、いうにいわれぬ悲しさが見え隠れするのを見逃してはならない。



シャガール 《サーカス》